

北海道 150 年道民検討会議 第 2 回北海道みらいワーキング 議事概要（事務局作成）

日時：平成 28 年 7 月 20（水）15:00～16:25

場所：第 2 水産ビル 4 階 4 F 会議室

【出席者】

<委 員>

小磯委員【座長】、大津委員、河崎委員、曾田委員、津山委員、山谷委員、(株)北海道バスケットボールクラブ・太田雅樹氏（折茂委員代理） 計 7 名

<事務局>

（北海道経済連合会）水野総括部長 （北海道商工会議所連合会）安宅総務担当部長
（北海道）平野政策局長、岩崎北海道 150 年事業準備室長、青山主幹、武藤主査

【議事概要】※発言順

- ・北海道 150 年事業は、道民のいろいろな人たちが参加したり巻き込むことが理想であるということ（基本方針（素案）の中で）確認できたのが良かった。
- ・札幌圏や特定の層が主体になってしまうことを一番危惧している。
- ・人それぞれ関心を持つ分野は異なるので、食やスポーツやインターネットなど、複数の事業の柱をたてるのが望ましい。
- ・新たに作るロゴマークの活用方法として、北海道マラソンの参加パンフレットや記念 T シャツを考えてみてはどうか。参加者のみならず、応援に来る方にも PR できるとともに、大会終了後も練習や他の大会で着てもらえる可能性もある。
- ・北海道マラソンなどのイベントに、ちょっとした（北海道 150 年事業）協賛イベントを挟み込んでもらうという形も考えられる。
- ・このワーキング（北海道みらいワーキング）と北海道 150 年道民検討会議の役割分担はどのように整理されているのか。このワーキングが担う役割の範囲はどこまでと考えればよいのか。
- ・ロゴマークのデザイン案や事業案などをプロポーザル方式で民間に委託することは素晴らしいと思うが、その選考過程にワーキングのメンバーが携わることはできるのか。
- ・8 月末の北海道マラソンに向けて、道内の全小学校・中学校でランニングのログをつける「みんなでランニングしようプロジェクト（以降、ランニングプロジェクト）」を実施して、上位 10 人くらいが北海道マラソンの本選で走る権利を得るようにするなど、地方がそれぞれ頑張っていることや努力していることの発表会みたいなイベントを行ってはどうか。
- ・ランニングプロジェクトは、町内会の見直しにも繋がる。例えば、町内会の高齢者の方々がウォーキング代わりに子ども達と一緒にグラウンドで走ることで、昔ながらのコミュニケーションがそこで生まれるのではないか。
- ・道内のプロスポーツチームは、地方におけるスポーツ教室やスクールを展開しているので、他のスポーツ団体も含め、うまく活用すると良い。
- ・北海道の今の魅力は、季節や環境を活用した観光と、美味しい食、つまり 1 次産業。特に 1 次産業を背景とした食育については、「北海道の食育」として、ひとつの軸があってもよいような気がする。
- ・札幌圏だけではなく、いろいろな地域で北海道 150 年を迎えられる雰囲気になってきており嬉しい。
- ・北海道の「一番星（＝その地域における道内一番の事柄）」をたくさん見つけたら面白いと思う。北海道は広いので、地域毎（例えば振興局毎）に、地域の一番にちなんだイベントを実施してはどうか。
- ・イベントの実施に向けて皆で汗をかき思い出に残る。成否について議論があることは当然で、イベントは打ち上げ花火だという意見もあるが、みんなで何かひとつのことを成し遂げるといのは、すごく思い出に残るし、地域内の連携が深まる。自分達の地域では何が北海道の一番星なのかを見直し

て、次の時代に繋がれたら面白いと思う。

- 北海道のプロスポーツ（北海道日本ハムファイターズ、北海道コンサドーレ札幌、レバンガ北海道、エスポラーダ北海道）は、みんな北海道の名前を背負っているのだから、新しいロゴマークを各チームのユニフォームに入れてPRしてもらってはどうか。
- 北海道のプロスポーツの試合会場において、1年間を通して、150年事業の一環として、例えばアイヌの音楽などに特化したコンテンツでPRするなどしてはどうか。また、各チームとも本州の方に必ず遠征して試合をするので、道外でもPRすることで、全国から人を呼び込めるのではないかと。
- 「バーチャル道民」に関して、北海道民や北海道に何らかの思いや、自らの原点、アイデンティティを持っている方をどう巻き込むのかという点について、強く関心を持った。北海道の外にいても、何か自分に繋がるものを持っている方々が、自分達の事として当事者意識を持てるような仕掛けが必要だ。そして、そのような方々を増やしていくことが必要。
- 北海道と何らかの縁のある方達が、日本国中、世界で活躍していけるような、種蒔きみたいなものを中核（コア）事業の中に入れていただきたい。
- みらい日誌の審査に携わらせていただいた感想として、高校生たちの地域に対する思いの中に、「自然を大切にしたい」というものが多く見られた。これは、当たり前のように見えて、すごく大切なこと。150年という節目で、「自然」や「環境」に対して、問題提起が必要なのではないか。当たり前のようにある「環境」を、与えられたものとしてずっと続いていくと考えると受動的になってしまうので、前向きに「環境」に関わっていき、能動的に「活用」することが必要ではないか。
- 人口が減っていくことに対して、強い危機意識を持ったり、ネガティブな受け止め方をしている方が多かった。今後人口が大きく増加する局面は想定しづらいことから、人口が減りながらも豊かな未来を創造できるようなビジョンを持てるメッセージを強く発していかなければいけない。
- 若い世代が、漠然とした不安感とか、北海道がどんどん暮らしづらくなっていくイメージを持っていて、夢よりも向き合っている現実の中で、このままでは北海道の元気がなくなっていくのではないかと不安感が滲んでいると感じた。
- 人口や経済の縮小を前向きに捉えながら、次の50年は、違う「幸福度」のようなものを見せていくと同時に、これを機に、北海道の暮らしやすさをはっきりと意識できるような物差しを見せていくということが必要であると感じた。
- 「北海道150年道民検討会議」は、本事業を大枠としてオーソライズをして、各産業界それぞれの分野のみなさんに浸透を図っていただく、そういう意味合いも込めて設置している。
- 「北海道みらいワーキング」は、具体的なことを考えて、煮詰めて、それを道民検討会議に持ち込み、検討会議における議論をフィードバックして、さらにそれを練り上げて検討会議に反映していく。つまり、このワーキングが中核的な役割を果たして、基本方針や事業計画という形になっていく。
- ロゴマーク等の採択の関係については、皆さんにも審査の中にご参加いただいて、見ていただける、そんな仕組みもこれから工夫をしていきたい。
- 「ランニングプロジェクト」は、北海道150年を契機として進めていけると有り難い。学校づくりがコミュニティづくりでもあり、そういうことにも繋がると思う。
- この取組の大事なコンセプトは、道民をしっかり巻き込んで取り組んでいくこと。実行委員会が主体だという意識になるべくならないように、いかに北海道民をしっかり巻き込んでいくかが非常に大事なところで、そこをしっかりと共有し、議論していくことが必要である。
- 無意識のうちに、札幌発の取組になってしまうので、そこはかなり自覚する必要がある。
- 人口減少、そこでの将来への悲観という部分に対する取組として、この北海道150年事業の意義というのは大きい。人口が減少すると経済の活動も縮小し、先行きの不安から消費や投資を控え貯蓄しようかという気持ちの萎縮に繋がり、結果的に地域の経済活動を萎縮させてしまうという悪循環が起こってくる。それを如何に断ち切るかが一番大事な部分。
- 人口減少に対する悲観的な気持ちではなくて、前向きな挑戦に気持ちを持っていくきっかけとして北

海道 150 年事業を位置づけるという筋があると、事業を PR していく中でも、道民など理解が深まり、結果的には、道民やいろいろな地域を巻き込んでいく取組に繋がるのではないか。

- ・基本方針の素案で、実行委員会が主体的に取り組むセレモニー、プロポーザル型の道民事業など中核（コア）事業と位置づけているが、実行委員会が責任をもってやるという意味では中核（コア）かもしれないが、むしろ全道各地で様々な主体が実施していく事業が中核事業ではないか。
- ・実行委員会が担う部分は、例えば象徴的な事業としての記念セレモニーでいいのではないか。実行委員会が責任を持って担っていくという位置づけで。
- ・連携事業の「連携」という言葉は、事業の実施主体が見えづらくなり、やや曖昧。多様な主体実施する、この部分（連携事業）こそ、北海道 150 年事業の中核・中心にあるというようなメッセージの方が、自分達が何かできるかなという主体的な問題意識に繋がっていくのではないか。
- ・連携事業には、継続する事業もあれば、集約的・集中的にやる事業もあるので、継続事業と連携事業というのは比較されるような位置づけではなく、事業のひとつの性格として分類してはどうか。
- ・中核（コア）事業の中で、実行委員会が実施する個別事業の例を挙げているが（【資料 1 - 1】の 3 ページ）、セレモニー事業は象徴的な記念事業として大事であり、これは独立されて整理した方がよいのではないか。また、プロポーザル型道民事業は非常に大事だが、全道各地でそれぞれ推進する事業に関わる大事な支援手法という形で、方法論・手法として再整理してはどうか。
- ・北海道にいろいろな思いを持って関わっている方は、全国、そして世界にいますので、そういう方々をこの機会にネットワーク化して、北海道の地域の力として活用してはどうか。インターネットを含む ICT の技術をうまく活用することで実現できるのではないか。
- ・基本方針（素案）の基本理念（【資料 1 - 1】1 ページ）について、「北海道の新しい価値、真の価値を共有し」の「真の価値」の定義づけるのは難しいので、「誇るべき価値」という表現にしてはどうか。
- ・基本方針（素案）にある連携事業の個別事業にある「北海道政策史の検証」（【資料 1 - 1】4 ページ）について、北海道の発展を支えた政策の歴史というものは、これまで整理されていないので、検証の対象が存在しないことから、「政策史の製作」というのが正確な表現ではないか。
- ・何気ない挨拶は、地域内のコミュニケーションのみならず、観光客へのもてなしという意味もあり、いつでもどこでも道民が北海道のためにやれることのひとつだと思う。
- ・基本方針（素案）の継続事業にある「新北海道史」の後継史の編さん（【資料 1 - 1】5 ページ）は是非実践していただきたい。北海道 200 年の時にもものすごく貴重な資料になる。北海道史や地域史の編さんは、間が開きすぎてしまうと、その空白を埋めるのがすごく大変な作業になる。この事業は是非、継続して立派なものにしていただきたい。

（参考）欠席委員のコメント

- ・松浦武四郎をキーパーソンとして設定するのであれば、簡単な紹介動画が効果的であろう。
- ・基本理念に「軸」を設定して、それに沿ったストーリーを構築すべきである。例えば「人材」や「誇り」など。各事業はそのストーリーに沿って説明すべきである。
- ・ロゴマークの作成については、「150」を印象づけるものにするべき。
- ・事務局を務めている道職員や、道経連、道商連の職員の率直な考えやアイデアを聴いてみたい。
- ・今後は、今回の作文のように若者だけでなく、各年代から意見を聴取してはどうか。
- ・市町村にそれぞれの「価値」を宣言してもらい、それをマップ化してはどうだろうか。
- ・金融機関、特に地方の信用金庫には、地域の貴重な情報が集まっていることを改めて認識すべき。
- ・事業は「継続」が大事である。地域に様々な種を根付かせるという意味で、プロポーザル型の道民事業は有効である。
- ・一次産業などの生産者に着目した事業があってもよい。
- ・道民の多くは企業人であるということで、民間企業、特に中小企業と連携を図って取組を進めるべき。

（以 上）